

特定非営利活動法人
民謡民舞公演実行委員会

通 信

発行日 令和4年1月31日
号数 第1号
発行 NPO法人民謡民舞
公演実行委員会
発行人編集人 三宅良二
事務局千葉市緑区高津戸町309-44

民謡民舞公演実行委員会発足記念公演



令和三年九月十九日（日）13時開演（12時半開場）江戸東京博物館大ホール

理事長あいさつ

三宅良二

正月気分が抜け、一月も早すぎて、二月です。いかがお過ごしでしょうか。

昨年4月に設立し九月の発足記念公演、十一月の民舞の祭典「秋の華祭り」、正月二日

から三日間の津軽民謡新春公演と、皆様のご支援とご協力のお陰で大勢のお客様にお越し頂き開催することが出来ました。誠に有難うございます。心より御礼申し上げます。

僭越ながら少し自己紹介をさせて頂きます。出身は島根県邑智郡邑南町矢上です。

東西に長い島根県の中央部広島県との県境の山間地域です。昭和39年生まれの田舎者です。実家は米作りとメス牛を飼って子牛を出荷する和牛生産の専業農家でした。良二という名前から「次男ですか」と聞かれることがあります。三男です。

民舞の祭典 秋の華まつり 令和三年十一月二十七日 江戸東京博物館大ホール

父親の「一番になると下り坂だから、二番で一番を目指して頑張れ」との思いから、長男は有二、次男が伸二、三男の私が良二。みんな二がつきます。五人兄弟の末っ子。三宅有二の弟です。

家族の中で民謡をやっているのは私だけです。子供の頃は民謡ブーム、土地柄特に安来節が盛んでした。

上京後、会社勤めの傍ら民謡や津軽三味線を教わりました。よく私が「人を持ち上げて、落とす」というようなことを言う方がいらつしやいます。それは三十年務めた会社がフオークリフトの会社だったからでしょう。フオークリフトは上げたり下ろしたりする機械です。その会社も令和元年53才の時に辞めました。

父親が亡くなった後、一人で暮らしていた母親を田舎から呼び、令和元年に89才で亡くなるまで十年程一緒に暮らししました。よく田舎から出て来てくれたなと思います。母親からは今まで聞いたことの無かった若い時の話など、いろいろ聞くことができました。やりきったいい人生だったかどうか。私に

はよく「良二や、あの時やりやあえかった。とならんように頑張りんさいよ」と言ってくれました。

平成28年からは、それ迄も十年程出演させて頂いていましたが、先輩方より引き継ぎ、浅草木馬亭での「津軽民謡新春公演」と、夏に行われています。「浅草に安来節とどじょう掬いが帰って来た」を主催することになりました。特にお正月の「新春公演」は津軽民謡の大御所、浅利みき先生の「私たちは舞台が無ければただの人だ。みんなでチケットを売って舞台を作ろう」との言葉が切欠で平成3年から故成田武士先生が中心となつて始まった伝統のある公演です。

今年もコロナ禍で先の見通しがつき辛い状況が続いておりますが、

3月13日プラッツ習志野市民ホールでの「千葉の民謡を唄おう民謡日本一選手権」。

7月31日浅草木馬亭での民謡公演。

8月21日市川グランドホテルでの当法人の総会及び懇親会。

9月には最上町、最上川舟

下りや山寺を巡る山形旅行。

10月10日江東区亀戸のカメリアホールでの一周年記念公演、を行うよう準備を進めております。改めてご案内させて頂きますが、どうぞご支援ご協力下さいますよう宜しくお願いします。

大勢のご参加をお待ちしております。

何かと不便の多い今日ですが、この状況が一日も早く解消され、平穏な日常に戻ることを願っております。

今年が幸多き一年になりますように。

民謡を始めた動機

福士豊次（遠田次八）

昨年四月、特定非営利活動法人として民謡民舞公演実行委員会が新たに設立され、同年九月には設立記念公演も大成功に開催されましたこと、誠にありがとうございます。民謡に携わる者として大変うれしく思います。

私は、会報の創刊時には81歳の後期高齢者です。生まれは山形県の山奥で（現在は酒田市）、家の前から

秋田県との県境にそびえる鳥海山を眺めながら育ちました。田舎育ち、津軽じょんから節の歌詞にある「母の背中で覚えた唄が」ではありませんが、子供の頃は民謡が好きだった母の唄声を耳にしながら過ごした記憶があります。

私が民謡を始めた頃は、55歳定年が一般的で、定年後家の中でゴロゴロする「粗大ごみ」が流行語になりました。何十年も働いて粗大ごみ呼ばわれは、されたくないと思つたのが、三味線と民謡を始めた動機です。当時50歳10ヶ月。近所の教室を見学して津軽三味線の音色と迫力に聞き惚れ、その場で小山流の先生に教わることになりました。

本来、津軽三味線だけを習うつもりでしたが、唄付けを覚えるには唄も知らないのと、発声練習もかねて最初に津軽数え唄（日本一）を習いました。その翌春（平成4年4月）幸運にも板橋区民謡連盟主催の民謡大会で総合優勝したのをきっかけに、三味線よりも唄に

シフトします。ところが、習い始めて10年位経験した頃から、仕事の関係で長らくお稽古を休まざるをえませんでした。

66歳で勤務を卒業後、本場の津軽三味線・津軽民謡を勉強したく、当初の先生の承諾を得て、福士豊秋先生にご指導を仰ぎました。三味線はなかなか上達しませんが、唄は豊秋先生のご教授のおかげで、青森県民謡コンクール大阪大会において、7部門全てで優勝、うち五大民謡2部門で総合優勝させていただきました。また、本場弘前における津軽五大民謡全国大会では「津軽三下り部門」で優勝することができました。

粗大ごみになりたくないとの思いで始めた三味線と民謡が、今や私の生きがいの一つとなりました。特に津軽民謡は、唄う人により節回しや伸ばす長さなどに違いがあり、大変奥深く、そこがまた面白さでもあります。故豊秋先生には心から感謝すると共に、頂戴した号に恥じないよう精進する

つもりです。

人生百年の時代、七十、八十は鼻たれ小僧の気持ちで頑張りたいと思っています。先生方にはご指導の程よろしく願います。

どんなに時代が変わろうと民謡・三味線・民舞が、伝統芸能として大事に引き継がれて行くことを願っています。その意味からも「民謡民舞公演実行委員会」のご発展を祈念申し上げます。

柿崎竹美(廣原竹美)

私は民謡を歌っている柿崎竹美と言います。秋田県由利本荘市で生まれ育ちました。幼い頃、勉強には自信はありませんでしたが、何よりスポーツが大好きで、卓球やバレーボール、陸上はマラソンに熱を入れていた小学中学時代でした。一方、歌が大好きな母の影響で中学二年から地元の民謡同好会に通い始めました。

本格的にやるなら若いうちから専念した方がいいと、中学卒業と同時に十五歳で秋田民

謡の名人初代浅野梅若師匠のもとで、住み込みの内弟子生活に入りしました。六年間の修業を終え、翌年、小椋佳さんプロデュースの歌語りミュージカルのオーディションに合格したのをきっかけに二十二歳で上京しました。その後、音楽事務所所属し更なる活動の幅を広げることができました。感謝の思いで日々過ごしていたある日。突然一本の電話が鳴りました。洗足学園音楽大学の教授からでした。「大学で音楽教育コースの講師として招きたい」との打診でした。

歌い手一筋に生きてきた自分が教育に関わるなど、想像もつきませんでした。新たな分野へ挑戦したいという思いと、自分に講師が務まるのかという不安、その間で揺れている中でした。しかし「頑張っている中でいただいた話なら必ず意味があるはず、まずは挑戦する」と決意し、二〇一七年四月、同大学の非常勤講師に就きました。今までの経験をもとに何度も歌って体で覚える実践的な講義と、秋田弁でユーモアを取り入れ、時には厳しく指摘し、時には温かく励ます、ことを心掛



けてます。

若い世代に民謡を伝え広める立場ではあるけれど、まずは学生に寄り添える一人の「人」でありたいです。

七年前にはご縁をいただき、津軽三味線奏者の廣原武美と結婚し同じ名前の竹美と武美になりました。本名はカタカナで書いたらどちらともヒロハタケミ、全く同じです。笑。

人生はどこまでも樂觀主義で。人生は面白く。どんな時も前向きに楽しく明るく、更に強く優しく生きていく事を、先輩の皆さんを通して日々学ばせていただいております。心から感謝でいっぱいです。

どうか二〇二二年も素晴らしい年となりますように心からお祈りしています。

鈴木亜由美

私は北海道北見市出身で幼いころは民謡がとても盛んでした。町内会や会社の民謡クラブなど、老若男女民謡教室にはたくさんの方が集い合唱から始まりみんなで声を出し、一曲一曲歌詞を覚えていった記憶が

今でも鮮明に残っています。

声を出す。特に大きな声を出すことはリフレッシュにとつて最高の行動の一つといえます。健康法にもあるように、発声はとても内臓に良いとも聞いています。生活環境のなかで大きな声を出せる場がないのも都会の弱みではありますが、稽古場に集まり民謡を歌うことができることは嬉しいことと思っております。民謡は伴奏無や、あるいは三味線・尺八ひとつでも楽しむこともできます。

時代の流れも伴い年々民謡の人口は減っています。子供のころから民謡を親しんでも学校の関係、社会人になれば仕事の関係、民謡離れに歯止めをかけられない場面を見てきました。高齢になれば尚更です。

そして、コロナ禍。たくさんの方の公演、大会が中止になりました。そんななか、NPO法人民謡民舞公演実行委員会を立ち上げるお話をいただきました。舞台活動により一人でも多くの方や子供たちに伝えることがで

きたらと思います。歌い手、三味線、尺八、太鼓、お囃子、踊りが揃うと華やかな舞台は圧巻です。まさに、日本の芸術・伝統文化そのものです。

競うだけではありませんが、体を使った競技と同じように体の一部である「声」を使った競技には、「夢」があります。歌や踊りで人々を和やかな場面にすることもできます。

上手い下手関係なく、楽しみましょうというのがこの会であり、活動により、伝え、

広め、多くの仲間が出来たら嬉しく思います。

先日、民謡に興味があるという若い子が門をたたいてきました。それも、「江差追分」です。

いままで全く歌ったことがないというではありませんか。驚きました。しかし、毎回勉強してくるのです。電車移動の際は必ず聞いて勉強していると教えてくれました。好きなことに民謡を選び学ぶ姿に、ひとつひとつ覚えていった遠い記憶が甦りました。



NPO法人は特定非営利活動法人と言われている。不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与することとを主たる目的とするものであり、公益を目的とする法人に当たると解されていると伺っております。

まさに時機を得た法人の設立であります。

私は微力ではありますが、理事長はじめ会員の皆様と共にこの団体の活動を頑張っていきたいと思っております。

父のお陰で

濱口ゆり子

初めまして。濱口ゆり子と申します。

私は、昭和43年、東京に生まれました。父は、初代・二代目の浜田喜一師匠の専属伴奏を長年務めた尺八奏者の松崎忠夫です。

3歳で初舞台を踏み、6歳の6月6日より、代々木上原の初代浜田喜一師匠のもとへ弟子入りしました。

当時、初代先生のもとへは名だたる民謡歌手の方が通われていて、子供の私は大人の皆様にとても可愛がって頂きました。現師匠の浜さち代先生も、そのお一人です。初代先生は晩年、十八番の「帆柱起こし音頭」のお囃子に、幼い私を使つて下さり、明治座等の大劇場に出演させて頂いた事、うつすらと記憶に残っております。初代先生に手を引かれて舞台に立つ写真を実家で見えた事があります。

一方、家での父のスパルタ稽古は厳しくて、出来ないとか叩かれて、叩かれれば痛くて泣いて、泣きながら歌うと「その泣き声はなんだ！」と、また叩かれて、本当に辛かった記憶があります。当時を知る方に会うと、皆さん開口一番「お父さん、厳しかったよね」と、言われます。子供の頃の私は、民謡が大嫌いでした。

初代先生は、とても優しく穏やかな方で、なまりで、幼い私には何を仰っているのか？ほとんど分からなかったのですが、彫りの深い

大きな瞳の、大変な二枚目でした。片肺を切除する大手術をして、お稽古は、横川雅美さん、鳴子勝栄さん、神庭昇東さん、新城守さん方の代稽古が多くなりました。中学3年の時に、受験勉強の為に初代浜田会を退きました。

高校を卒業して18才から、二代目浜田喜一師匠に弟子入りしました。その時の入門の条件が「松ちゃん（父の仇名）、俺に預けたからは、芸の事は、親子でも一切口出ししないでくれ。」でした。

二代目先生の、厳しくも丁寧な教えで、初めて民謡が楽しいと思い始めました。当時はもう、住み込みの内弟子は取っておられなかったのですが、昼過ぎに伺つて、奥様と一緒に買い物に行き、お夕飯を先生と一緒に頂き、習いに来られたお弟子さん達にお茶を出し、お見送りをし、最後はお稽古場のお掃除をして帰宅する、という生活を週2日させて頂きました。お夕飯の時に、色々話して下さった事、戦争に海軍で出兵された事等、よく覚えています。



また、時々先生が鼻唄で歌う「北海よされ節」や「道南盆唄」の素晴らしかったこと！

浜田千鶴子先生には三味線も習いました。三味線譜面の書き方も教わり、現在とても役立っています。以前は「鬼の浜田」と言われ、兄弟弟子達は随分と泣かされたそうですが、私が教わった頃にはそんなに厳しい事はありませんでした。誉めてもらった事は一度もありませんが、「よし。」と、たった一回言って頂いた事があります。

その後、大阪のお仕事に先生の前座で唄わせて頂きました。その緊張のせいかな？新幹線の帰りの切符を失くしてしまい、頂いた日当で、自分で切符を買って帰りました。「その時も、父に皆さんの前で怒鳴られました。」しかし父の七光りのお陰で、当時は民謡ブームもあり、日本全国の興行に連れて行って頂きました。二代目浜田会も、毎年のホテル椿山荘での新年会、夏は熱海の静観荘での一泊の温習会、

華やかな思い出が沢山あります。

二代目先生は68才の若さで他界されました。私は22才でした。もう少し長生きして下さっていたなら、私の人生も変わっていたかもしれません。私はその頃、今の主人と出会い、恋をしてしまいました。先生の死と、自分の結婚で、私は民謡を辞めました。もう、民謡に未練は無く、振袖の袖を切ってお嫁入りしました。

3人の息子に恵まれ、子育てに忙しい日々の中、出掛けた先のデパートで、北海道物産展のBGMに浜田先生の唄が流れていた事がありました。私はその場を動けなくなり「こんな、皆が通り過ぎる所で流される歌じゃない！皆、ちゃんと聴いて！」と憤怒の情が湧きおこり、懐かしさと寂しさと、複雑な感情に涙した事があります。

民謡を離れて21年後、父が心臓の病いがもとで他界しました。70才でした。急に亡くなったので、お弟子さん達は困り「娘さん！お

稽古に来て下さい！」と頼まれました。しかし、21年間まったく触れずに来た民謡です。出来るわけがない！と思いましたが、主人と息子達が「爺ちゃんが喜ぶから、やってあげなよ！」と背中を押してくれました。それから、私の第二の民謡人生が始まります。

しばらく後に、お弟子さんから聞きました。父は最後の方のお稽古では、三味線の糸巻きを回す力もなく、お弟子さんに調弦してもらっていたそうです。幼い頃、厳しくされたせいで、私は何度か父から「一緒に民謡やってくれ。」と言われても「やだ！」と断り続けていました。何と親不孝な娘でしょう！！悔やまれます。

当時私は、津軽民謡の伴奏が出来なかったので、新聞の折込広告で見つけた近所の、小山 貢葉先生の所へ、習いに行きました。貢葉先生は、ショートヘアでスラっとした、とても綺麗な女性で、私の大好きな宝塚歌劇団のスターの様な方でしたが、55才の若さで他界されました。

その後、現在の師匠、小山 竜昇先生に入門しました。竜昇先生は懐かしのTV番組「キンカン素人民謡名人戦」で、永らくレギュラー伴奏者を務めた方で、三味線博士でもあります。芸の技巧はもちろん、三味線の扱い方等、色々な事を教えて下さいます。細川たかしさんのバック三味線としても活躍されていて、先生と栗原光康師匠のお陰様で、私も一員として、長山洋子さんとのジョイントコンサートに青森から沖縄まで帯同させて頂きました。

唄の方では、浜田門下の姉弟子だった浜さち代先生に師事しています。温かくて面倒見の良い方です。たまにする、両浜田先生の思い出話が何より嬉しいです。現在は、子育ても終わりのセカンドライフ、とても民謡が楽しいです！

4年前に尺八の山根菁童先生の新年会で知り合った三宅良二さん。「今度、頼むよ。」と、口ばかりが殆どの芸人さん達の中で、本当に、私を呼んで頂きました。

義理堅く、情けに厚い人です。叱咤激励、絶妙なサジ加減の飴とムチで私を鼓舞して下さる兄貴の様な方です。微力ながら、これからも日本人の心の故郷である民謡を一生懸命頑張つて歌い継いでいきたいと思つておりますので、皆様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。どこかでお会いできたら、お気軽にお声を掛けて下さい。楽しみに待つております！

津軽三味線との出会い

富士豊美香（三森美香）

この度は、NPO法人民謡民舞公演実行委員会のご設立、誠におめでとうございます。

私は、今でこそ津軽三味線を弾きますが、思えば民謡には縁がありませんでした。周囲に民謡に携わる者はなく、恥ずかしながらソーラン節や花笠音頭すら知らなかったほど。そもそも音楽自体を、学校の授業以外に触れる機会はほとんどなく育ちました。

きっかけは、津軽三味線の体験講座。それも特に三味線に惹かれたわけではなく、時折公

民謡の講座に参加していた流れで申し込んだしいです。三味線を見るのも初めて、当時27歳の私は、講座後に受講者で作ったサークルの副代表に選ばれ、立場上辞められず続けました。当初西洋のとは異なる三味線の音階に違和感を覚え、民謡はまるで異国の音楽として聴こえたものです。

三味線の良さが徐々に分かってくれた頃、NPO法人青森民謡協会主催の青森の唄まつりの舞台を観て、津軽民謡と津軽三味線のすばらしさを知ります。なかでも、重厚かつ独特の間を擁する五錦竜二先生と、軽妙で唄を包んで乗せる富士豊秋先生の、対照的な三味線に魅了されました。

やがて唄付けをしたいと、思い切つて豊秋先生と二代目成田雲竹女先生の門戸を叩きます。三味線と出会つて、実に4年が経過していました。弟子入りしてからは、芸を間近で見聞きできるお稽古が、毎回本当に楽しみでした。豊秋先生が三味線を奏でれば新しいフレーズがほとばしり、唄



えば流れるような節が生み出されます。「美香、今の録ってらか」同じものは二度弾けない即興のため録音したかとのことです。おもちゃのように三味線と戯れる、まさに天才でした。お稽古の合間には、昔の芸人の話を興味深く伺いました。津軽民謡の本やレコードに二次元



で存在する芸人達が、生の人間として立体的に浮かび上がる瞬間でした。

こうしたお稽古の場のほか、福豊会の合同稽古では、月に一度弟子同士で伴奏しあつて切磋琢磨しました。また、津軽出身で市井を津軽民謡に生きる小山内兄弟と知り合つてからは、民謡酒場で唄付けを勉強しました。民謡酒場へ遊びに行くうちに佐々木貞勝、小松みどり両先生

のお声がかかりで浅草にある民謡の店みどりにて、時折ありがたくも修行させていただいております。

三味線を遅くに始め、民謡の知識が皆無だったこと、それでありながら会社勤めで時間がないことなど、津軽三味線奏者としての道のりは、遠く長

いことを自覚しております。これを熱意で補い、民謡と三味線を通じて巡り会った先生方のご指導を仰ぎ、お力をお借りしながら、一歩ずつ進んでいけたらと思います。

津軽三味線とは偶然の出会いでしたが、師匠を始めとする先輩が残した民謡や三味線とその想いを、私なりに紡いでいく所存です。

末筆ながら、民謡を盛りたてたいとの民謡民舞公演実行委員会の想いが実を結びますことを、心より祈念申し上げます。

編集後記

一年が経つのがなんと早いことか。貴重な一年です。一月は行く、二月は逃げる、三月は去る、この時期は特に早く感じられます。

コロナ禍の影響で各種会合の開催がいまだ困難な状況からこの度、会報を発行することになりました。今回会報を発行するにあたり、快く寄稿頂きました皆様有難うございました。この場をお借りして御礼申し上げます。

会報は年に2回程度発行予

定です。行事の予定等も早めにご案内させて頂きます。次回発行は今夏の予定です。皆様からの原稿をお待ちしております。テーマは自由。民謡のことでも、民謡以外のことでも身近なことから、専門的なことまで、自由です。連載も歓迎です。題名を付けて千二百文字程度におまとめ下さい。写真があるとお助かります。写真は編集後返却します。また個別にお願いさせて頂きますが、その節にはどうぞご協力の程、宜しくお願いします。

ワードとエクセル、糊とはさみとダイソーのコピーで作りました手作りの会報です。十分注意しておりますが誤字脱字や、見づらいところもあるうかと思ひます、どうぞお許し下さい。お気づきの点がありましたら何なりと申し付け下さい。

十数年前から同郷の集まり「東京邑南町ふるさと会」と、母校の「矢上高校卒業生会東京支部」の事務局をしております。もともとお世話役が性に合つています。

寒さ厳しい日が続いております。どうぞご自愛下さい。